



Title	ハロルド・ラスキーの苦悩と孤独 : Isaac Kramnick & Barry Shermanの伝記によせて
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 151-161
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99225">https://hdl.handle.net/11094/99225</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ハロルド・ラスキの苦悩と孤独

— Isaac Kramnick & Barry Sheerman の伝記によせて —

岡 田 新

1.

ハロルド・ラスキほど、戦後のわが国の論壇で、もてはやされた政治学者は、ほかに見あたらない。ラスキの書物はそのほとんどが日本語に移され、ラスキは20世紀を代表する政治学者として、盛んに論じられた。

しかしあが国でのラスキの盛名は、純粋に学問的な業績によるものとは言い難い。ラスキのおびただしい時論的な著作は、そのほとんどが紹介され、議論の対象となった。にもかかわらず、ラスキの最も学問的著作とされる初期の主権論は、わずかに一部が翻訳されたにすぎない。わが国での関心は、むしろ現実政治にかかるアカティブな政論家としてのラスキにあった。

だがラスキの政治的立場は、一見めまぐるしい変遷を遂げた。1920年代に国家を至高のものとする国家一元論に反対する多元論者として学問的なデビューを果たしたラスキは、労働党政権の崩壊とナチズムの台頭を眼前にして、1930年代には急速にマルクス主義に接近する。そして労働党の左派を代表する論客として、労働党全国執行委員会の一員として華々しく活躍し、第二次大戦中からは「同意による革命」を提唱した。

こうしたラスキの姿は、軍国主義体制の崩壊の後、東西両陣営の狭間で民主的な再建の道を模索したわが国の論壇で少ながらぬ共鳴者をもつた。イギリス自由主義の伝統を背負いつつ、マルクスの社会主义に近接した書齋の革命家ラスキの姿は、わが国的一部の知識人にとって、狭き道をともにする同伴者として受け取られたのである<sup>(1)</sup>。

だが戦後のイギリスでは、ラスキの評価は必ずしも芳しいものではなかつた。大量失業とファシズムの時代には、ラスキの論説はイギリスの論壇で火花を散らした。イギリスの歴史家マックス・ベロッフは、1930年代を「ラスキの時代」とすら呼んだ。けれども第二次世界大戦後、暴力革命を是認したとする報道に抗議して名誉毀損の訴訟を起こしたラスキは、裁判にあえなく敗れ、深く傷ついた。またラスキが献身した労働党も、ラスキが唱えた急進的な社会主義ではなく、自由党の系譜をひくベヴァリッジの社会福祉政策や自由党のケインズが構想した経済政策を政策的な支柱として採用した。さらにラスキの反対にもかかわらず、労働党はソ連を仮想敵とするNATOの創設へ突き進んでいった。

暗い対決の時代を象徴し、ロシア革命を「新しい信仰」とまで賛美したラスキは、戦後の労働党にとっては、決して歓迎される人物ではなかった。1945年総選挙の時、チャーチルは労働党の勝利を阻むために、選挙戦でラスキを革命のイデオローグとして槍玉に挙げた。労働党のイメージを傷つけることを恐れたアトリーは、ラスキに沈黙するよう懇請した。このエピソードは、戦後にラスキが味わった深い孤立を物語っている。ラスキは失意のうちに世を去り、論壇からも忘れられた。時代と切り結ぶことによって名を馳せたラスキは、歴史の潮が変わるとともに、静かに忘却の淵へ沈んでいったかにみえる。

アカデミックな歴史研究の領域でも、1970年代にはいると、ケインズやベヴァリッジはもちろん、アトリー・ダルトン、ベヴァンやベヴィン、そしてトーニーなど、大戦中と戦後改革の時代のリーダーについて優れた伝記がつづりに出版された。その中にあってラスキは、研究対象としても疎んじられたきたかにみえる。むしろ極東の学界の方が、この異端の学者に関心を寄せ続けた。現代史家モーガンは、このままでは、日本人が研究の空白を埋めるかもしれない、と案じたほどであった<sup>(3)</sup>。

だがラスキ生誕100年（1993年）を迎えて、イギリスでもようやくラスキについての本格的な研究が出版された。本稿でとりあげるクラムニッ

ク・シアマンの伝記は、こうしたラスキ・リヴァイヴァルの代表的な成果の一つに数えられる<sup>(3)</sup>。

ラスキの評伝としては、ラスキと親交の深かったキングスレー・マーチンの手になる回想録風の伝記がある。またラスキの政治思想の展開過程を解剖した研究としては、ディーンの研究などがある<sup>(4)</sup>。600頁におよぶ浩瀚なクラムニック・シアマンの新たな伝記は、この中で、思想家としてのラスキよりも、政治活動家としてのラスキに焦点をあわせた伝記として独特の光彩を放っている。クラムニック・シアマンは、英米に散在する未公開書簡を始めとする関係史料を丹念に渉猟し、ラスキの経験を時代の動きの中にあとづけ、これまで知られていなかった重要な史実を明るみに出して、従来のラスキ像に大きな修正を施した。

しかし政治学者としてのラスキの存在の大きさに比べて、この伝記のもつ意義はまだ必ずしも広く認められているとは言い難い。そこで本稿では、クラムニック・シアマンの伝記が明らかにした史実を確認し、ラスキの研究にとってそれが持つ意味を考えてみたいと思う。

## 2.

ラスキは、マンチェスターの裕福なユダヤ人の一家に生まれた。だがラスキの人生にとっては、こうした出自は終始重いくびきであった。後年労働者の集会で演説する時、ラスキは富とともに生まれたことを謝罪することから始めたという。だが真の問題は、富ではなく、謝罪すら不可能なユダヤ人という出生にあった。

若きラスキが『選ばれた民』と題された未公刊の青年ユダヤ人の物語を創作し、自分の出生と内面的に格闘したことは、よく知られている。しかしキングスレー・マーチンは、ラスキは青春時代に決然とユダヤ教を棄てて「普遍主義的な哲学」に与し、ユダヤ人問題を「心から棄て」るのに成功した、と考えていた。それ以来、ラスキの生涯でユダヤ人問題は、「少なくとも表面上は」重要な意味を持ったことはなかった、とマーチンは書いている<sup>(5)</sup>。

クラムニック・シアマンの伝記の最大の特徴は、膨大な書簡などを基礎史料として、この問題に改めてメスをいれ、ユダヤ人問題をめぐる葛藤が、その後も生涯にわたってラスキを苦しめ続けていたことを明らかにしたことにある。ラスキは、意識的にコスマポリタンとして振る舞い続けた。だがラスキ自身の手紙は、ラスキがユダヤ人としての存在にどれほどこだわり続けざるをえなかつたかを、赤裸々に物語っている、と著者は言う<sup>(6)</sup>。ここではこの点に視点を引き絞って、クラムニック・シアマンの伝記の豊富な内容を読み拾つてみることにしよう。

言うまでもなく、ユダヤ人はイギリスで最も差別された民族の一つであった。19世紀末、東欧から渡ってきた無数の移民で、イギリスのユダヤ人の人口は激増した。中でもラスキが育ったマンチェスターのユダヤ人は、当時3万5000を数え、ロンドンにつぐ人口に膨れ上がっていた。流浪の民であるユダヤ人は、宗教的な自律性を保ちつつ、イギリス経済の歯車の隙間に食い込んで生活の糧を得ていた。

とはいひエイスを救世主と認めず、生活習慣を全く異にするユダヤ人に対するイギリスでの差別は、厳然たるものがあった。そうした差別に抗してゲットーから這いあがるのに成功するユダヤ人は、ごく一握りに過ぎなかつた。だがラスキの父ナタンは、見事にそれに成功した例外の一人であった。ラスキの祖父は、1831年にポーランドからイギリスに移民してきた。その長男ナタンは、学校教育を受けずに綿製品の貿易商の下で働き始め、やがて弟と会社を起こしてインドと直接取引し、ランカシャー有数の綿製品の輸出商にのしあがつた。

しかしナタンは、富を築いた後もユダヤ人地区を離れず、伝統的な儀礼を墨守してシナゴーグの長をつとめ、慈善病院の建設にあたつた。その結果、ナタンはロスチャイルドなどと並んで、イギリス全体のユダヤ人を代表する委員会の一員に任じられ、マンチェスターのユダヤ人移民に住まいを与え職を世話し、マンチェスターの「ユダヤ人の王」とあだ名されるまでに昇りつめる。ナタンは、ユダヤ人社会のリーダーとしてユダヤ人の地位向上のため

に闘い続け、後にはイギリスのユダヤ人の代表としてパレスチナ委任統治についてイギリス政府と協力する任務まで務める。

こうした環境に育ったハロルド・ラスキがユダヤ人に対する人種差別にたいする憤りをもつたことは、想像に難くない。事実、少年時代のラスキは、父ナタンが、ユダヤ人の移民を禁じようとする法案に反対したチャーチルを応援し、マン彻スターでの立候補の後ろ盾となり、結局反ユダヤ主義の合唱の中で一敗地にまみれるといった事件を眼にしていた。

しかしハロルド・ラスキは、父と同じ道を歩もうとはしなかった。ラスキに突きつけられた人生の最大の課題は、まず父ナタンのような生き方を繰り返すべきかどうか、ということであった。そして父と違う道を選択したハロルドは、自分の生き方に確信を持つ父ナタンの家父長としての権威と衝突し、また父の愛情をめぐって兄と秘められた格闘を演じることになる。ラスキ家を覆うこうした複雑な家族模様に、クラムニック・シアマンは注目する。

兄ネヴィルは、病弱な弟ハロルドと違って、早くから父親の期待を集め、オックスフォードから法廷弁護士の道へと進んだ。小身で体格が貧弱で兵役にもつけなかった弟ハロルドとは違って、体躯に優れた兄ネヴィルは、第一次大戦に従軍し、ラビの娘と結婚してナタンの後継者として、順調にイギリス人ユダヤ人社会の名士へと上昇していった。これに対して病気がちのハロルドは、まだオックスフォード大学ニューカレッジに進む前に、7才年上のキリスト教徒の女性フリーダと早熟な恋に落ち、家族の反対をおしきって秘密に結婚する。だがユダヤ人社会にとって、異教徒との結婚は裏切りにも等しい。若いカップルは一旦無理矢理引き離されたものの、大学を卒えた後、ラスキは断然結婚生活を再開した。とはいえるラスキは、兵役につくこともかなわず、一時ジャーナリズムに席をおいた後、父から息子としての存在そのものを否定され、家族と絶縁したまま、カナダのマッギール大学そしてハーバード大学で講師となるために大西洋を渡る。ハロルドは、家族やユダヤ人社会と正面から対決し、あえてそれから自らを切り離す道を選んだのであつ

た。そこには、親の期待に応える優れた息子、兄ネヴィルと、家族と社会から見放された放蕩息子の弟ハロルドとの、あまりにも対照的な道があった。

クラムニック・シアマンは、自立した「新しい女性」フリーダに惹かれた若きラスキが、近代科学に背を向けた伝統的なユダヤ教、とりわけ女性を家父長の下に隸属させ、家庭に閉じこめるその女性観に強い反発を抱いていたことを指摘する。妻となるフリーダは、過激な婦人参政権運動の活動家シリヴィア・パンクハーストの親友として活動していた。だがクラムニック・シアマンは、若き大学生ラスキ自身も、過激な婦人参政権運動に挺身し、サリー州オックスステッドの鉄道の駅を爆破する爆弾テロの企てに自ら手を染めていたことを明らかにする<sup>(6)</sup>。

この青春時代の衝撃的な秘密について、ラスキは生涯沈黙を守り通した。だがこの事件は、青春のラスキが、父と伝統的なユダヤ教の権威にどれほど渾身から反発した反逆児であったかを雄弁に物語っている、と著者は言う。

### 3.

ハーバード大学でも、ラスキは警察官のストライキを支援するために、反ユダヤ主義者からの誹謗を浴びせられる。1920年、追われるようイギリスに帰国したラスキは、フリーダがユダヤ教に改宗することによってひとまず家族と和解した。それはラスキにとって、財政的にも意義ある和解であった。だが左翼の理論家と父との緊張は完全に消失したわけではなかった。ラスキは、有名人との交際を、時に虚言も含めて誇示し続けたが、クラムニック・シアマンは、それは父ナタンの評価を何とか勝ち得ようとする心理からではなかったか、と推測している<sup>(6)</sup>。

クラムニック・シアマンによれば、アメリカから帰国したラスキは、マーチンが考えたように決してラジカルになったわけではなかった<sup>(6)</sup>。それどころかラスキは、逆に労働党をはじめ、自由党、更に保守党に属する政治家と親交を結び、生臭い権力の回廊で「極めて現実的な政治的影響力」(ラスキ自身の言葉)を獲得することに腐心したのであった。イギリスに帰ったラス

キは、「エスタブリッシュメントを批判しつつ、それに身を委ねる」いわば政治のプローカーになった、とクラムニック・シアマンは捉える<sup>(10)</sup>。

事実ラスキは、社会主义を説くパンフレットに忙しく筆を走らせながら、各政党の有力政治家と夕食を共にし酒を酌み交わして談笑し、「政治的な影響力」を築いていった。総資本と総労働の劇的な対決の瞬間であったジェネラル・ストライキの時も、ラスキは、自家用車で労働組合幹部を運びながら、他方でボールドゥン首相の側近を通じて、政府と労働組合側の仲介を画策したのである<sup>(11)</sup>。

けれどもこうした役どころを演じる上で、ユダヤ人であることは、致命的な欠陥であった。当時イギリス政界にはユダヤ人は数えるほどしかいなかつた。イギリス労働党の基盤である労働組合運動は、圧倒的に非国教徒の影響下にあった。レオナード・ウルフを除けば、ラスキはほとんど唯一人のユダヤ人の労働党の理論家であった。ユダヤ人を嫌う労働組合の指導者は、ラスキに猜疑の眼を向け続けた。労働党のブレーンとして八面六臂の活躍を続けながらも、ラスキは結局労働運動のアウトサイダーから抜け出ることができなかつた、とクラムニック・シアマンは指摘する。

しかし逆に数少ない左翼のユダヤ人であることは、時に重大な力をラスキに与えた。第二次マクドナルド政権では、パレスチナ問題について、ラスキはその力を縦横に駆使することになる。1929年秋、パレスチナでのアラブ人とユダヤ人との衝突を受けて、ウェップ植民大臣は、ユダヤ人の入植制限を打ち出す報告をまとめた。これに対して英米のシオニストは、激しい抗議運動を展開し、ロンドンからユダヤ資金を引きあげるという露骨な恫喝をちらつかせ、労働党政権に政策の変更を迫った。この時、もともとシオニズムには反対であったはずのラスキも、アメリカのシオニストの友人の懲憤にあって、マクドナルド首相と厳しい口調で対決する。そしてラスキは、ユダヤ人社会と労働党政権の間を取り持ち、妥協策で事態を収束させる中心的な役割を演じることになった。クラムニック・シアマンによれば、この事件こそ、ラスキの「政治的影響力」が見事に奏功した最大の成功例に他ならな

い。(12)

しかし大恐慌とマクドナルド労働党政権の崩壊は、こうしたラスキのマヌーバーの抛って立つ基盤をあっけなく崩壊させてしまう。ラスキは、マクドナルドの「裏切り」を、金融資本に仕組まれた宫廷革命の陰謀として厳しく指弾し、資本主義と民主主義の間に本質的な矛盾があると論じて、1930年代には労働党左派の闘将として重きをなしてゆくことになる。ファシズムを攻撃し人民戦線を支持したラスキの鋭い筆鋒は、世界の耳目をこの小身の教授に集めることになった。

けれども、ナチスによるユダヤ人虐殺の実態が明らかになるにつれて、ラスキは徐々にユダヤ人の一員としての自覚を強めていった。クラムニック・シアマンは、ラスキの大戦中の政治的変化の背景としてこの点に注意を喚起している。ラスキは、兄ネヴィルとともに、モーズリー率いるイギリスのファシスト党とイーストエンドのユダヤ人との衝突を避けるために努力を傾注し、ユダヤ人亡命者の世話をかけずり回った。さらにユダヤ人虐殺の空前の規模が明らかになるにつれ、ラスキは同じユダヤ人として強い憂鬱に襲われ、イギリスのユダヤ人の一員として、ユダヤ人の保護に務めてきたチャーチルにも、深い感謝の念を表明するに至る<sup>(13)</sup>。

そして1945年の母の死とともに、ラスキは、ついに忌み嫌ってきたシオニズムへの転向を宣言する。戦後のラスキは、文字どおり「とりつかれた」ように、パレスチナ問題に取り組み、アラブ寄りのベヴィン外相と死闘を演じる。もともとイギリス労働運動のアウトサイダーに過ぎなかったラスキは、労働運動に頭脳を提供することによって、インサイダーとして政治を操ろうしてきた。しかしクラムニック・シアマンによれば、アラブ人とユダヤ人の流血の激突を前にして、難しいラスキの綱渡りはついに破綻し、ラスキは、純然たるアウトサイダーの道を選び取ったのであった<sup>(14)</sup>。

もっともシオニズムに転向しても、ラスキは伝統的なユダヤ教に戻ったわけではなかった。父ナタンのようなイギリスのユダヤ人社会も、もともとシオニズムを支持していたわけではなかった。ラスキは、あくまでも伝統的な

ユダヤ教には批判的であり続けた。だが、クラムニック・シアマンによれば、シオニズムに転向したラスキは、長く装い続けてきたコスマボリタンという衣を脱ぎ捨てて、「自分の家」へ回帰したのである。ラスキ自身も、シオニズムに転向した自分を、自嘲ぎみに「帰ってきた放蕩息子」と呼んでいたのであった<sup>(15)</sup>。

## 5.

こうしてクラムニック・シアマンは、ラスキの華々しい政治的遍歴の裏側に、父とユダヤ教の伝統に反抗して家を飛び出し、彷徨の果てに、結局ユダヤ人へと立ち戻らざるをえなかったラスキの屈折した軌跡を読みとる。

一部をかいまみただけでも、クラムニック・シアマンの伝記が、伝説的な社会主義の英雄を蘇らせようとする研究でないことは、誰の目にも明らかであろう。そこに描かれたのは、家族関係に引き裂かれ、権力の周辺を跳梁し、惨めに敗北し故郷に帰ったユダヤ人学者の姿であった。そこには、普遍的な思想を紡ぎだした偉大な民主的社会主义者というラスキ像を根底から搖るがすものが含まれている。広い歴史の文脈からみれば、ラスキのこうした孤立と敗北は、1945年のアトリー労働党政権の政策や思想が、急進的社会主義ではなく、ベヴァリッジやケインズの自由主義の系譜に立つことを改めて裏書きしている、と言うことができるであろう。

クラムニック・シアマンの伝記では、ラスキの著作それ自体の分析は、意識的に脇におかれている。とはいっても、現実政治にかかわったラスキと、政治理論をものしたラスキとは不可分の存在である。ここでは、ラスキが、国家の権威に挑んだ時、ユダヤ教における父の権威と国家の権威とが二重写しになっていた、といった著者の指摘や、シオニズムへの転向と「同意による革命」の理論的な関係は如何、といった個々の論点を掘り下げることはできない。だがクラムニック・シアマンが明らかにしたユダヤ人としてのラスキの苦悩が、ラスキの学問にどんな影響を与えたのか。それは、今後ラスキの思想を検討する場合に、慎重な検討を要する問題の一つとなるであろう。

クラムニック・シアマンの伝記は、ある意味では、冷戦後の醒めた眼から、1930年代という「失われた世界」の偶像の破壊をもくろんだ研究と言えるであろう。確かに虚飾に飾られた彫像よりも、偶像を包んでいた金箔が剥げ落ちた時、初めて現れるむき出しの素顔こそ、歴史から学ぶべき真実であるのかもしれない。

しかし思想家の作品が、思想家の生を映し出しているとしても、そうした経験がいかに普遍的なロジックへと昇華されているかは、やはり別に吟味されねばならない。思想はそれ自体の範疇と論理の体系の批判を通じて、継受される。思想家の伝記的な研究は、思想の体系的な分析とはひとまず次元を異にしていることを忘れてはなるまい。

ではラスキは、その苦しみをどれほど普遍的な論理の次元へと蒸留することができたのであろうか。ラスキの苦しみと経験は、『政治学大綱』や『危機にたつ民主主義』の行間に、どのように凝縮されていたのであろうか。この間に答えるためには、ユダヤ人としてのラスキの懊惱を背景に置いて、ラスキの作品を一つ一つ再構成する作業を待たねばならないであろう<sup>(16)</sup>。クラムニック・シアマンの伝記研究は、こうした抜き差しならない課題を、政治思想の研究に突きつけていると言えるかもしれない。

### 注

1. 戦後民主主義のオピニオンリーダーであった丸山真男が、復員後すぐに発表した論文の一つが「超国家主義の論理と真理」、「近代的思惟」などと並んで、ラスキの『信仰、文明、理性』についての文章であったことは象徴的な意味を持っている。
2. K.O. Morgan, *Labour People*, Oxford University Press, p. 92.
3. Isaac Kramnick & Barry Sheerman, *Harold Laski: A Life on the Left*, Harmish Hamilton, 1993.
4. Kingsley Martin, *Harold Laski, A Biographical Memoir*, Victor Gollancz, London, 1953. H.A. Dean, *The Political Ideas of Harold J. Laski*, Columbia U. Press, N.Y. 1955. その他ラスキについての我が国の代表的な研究文献としては、横越英一他

ハロルド・ラスキの苦悩と孤独—Isaac Kramnick & Barry Sheerman の伝記によせて—

『ハロルド・ラスキ研究』(勁草書房、1954年)、小笠原欣幸『ハロルド・ラスキ』(勁草書房、1970年)、水谷三公『ラスキとその仲間』(中公選書、1970年)等を参照。

5. Kingsley Martin, *op.cit.*, p. 21, p. 25, p. 206.
6. Isaac Kramnick & Barry Sheerman, *op.cit.* p. 205.
7. *Ibid.*, p.66
8. *Ibid.*, p.205.
9. *Ibid.*, pp.159-160. クラムニック・シアマンは、ラスキが北米にわたってボストン警察官ストライキに直面してから、「資本と労働の闘争」の重要性を理解したというマーチンの解釈に、根本的な異議を唱えている。
10. *Ibid.*, p.159.
11. *Ibid.*, p.244.
12. マーチンもこの事実を認めていたが、マーチンは、ラスキにとってパレスチナ問題はあくまでも「一時的な関心」に過ぎないもの、と片づけていた。  
Kingsley Martin, *op.cit.*, p.210.
13. Isaac Kramnick & Barry Sheerman, *op. cit.*, p. 460.
14. *Ibid.*, p.552.
15. *Ibid.*, p.476.
16. 極めて簡単なスケッチではあるが、拙稿「ハロルド・ラスキ」(『西洋政治思想史II』、新評論、1998年所載)をも参照。

